

隋唐時代の上層郷邑社会（そのⅡ）

矢野主税

目次

はしがき

第一節 全国から移住の家々

第二節 移住と定着

第三節 婚姻関係の成立

結語

はしがき

後漢時代の地方郷邑社会では、土豪とか豪族とか表現される地方勢力が、社会的な支配力をもっていたと同時に、県や郡の府廷に一族の人々をその属僚として送りこむことによって、政治的な発言権をもち、郡守、県令と協力して地方政治にあたっていたことは、既に先学が明らかにされたところである。一方中央においては、全国各地から京師に集まって

代々高位高官を占め、「世吏二千石」とか、「公族」などと呼ばれる上流社会層が成立していたことも指摘されている。すなわち、少くとも後漢末期には、地方郷邑社会の支配勢力たる豪族とは、全く縁のない中央における政治的上流社会層が成立していたといつてよい。彼等こそ、中央権力にその生存のすべてを寄生する、寄生官僚層としての貴族社会を形成していた。すなわち、元来は豪族の中のある家が官僚化して、中央官僚家としての地位を確保し、漸次地方の在地一族となれて、何代かたつ間に、在地性を失つていった場合が多かった。貴族の最も基本的な性格は、このような、在地性をなくして、中央権力に依存する寄生官僚たることにあつた、といつてよいであらう。^①

ところが隋唐時代となると、後漢末期の中央官僚社会にみられた状態が、地方郷邑社会においてもおこつたように思われる。この時代には、後漢末期にみる豪族中心の地方郷邑社会の代りに、全国の地域から集まつた官僚達によって、その上流社交界が構成されている郷邑社会が見出される。このことは、「隋唐時代の上層郷邑社会(そのⅠ)」^②で、既に指摘したところである。この新しい郷邑社会では、在地性の強い豪族達とは異なつて、地方官僚として全国を巡つた後に、その地におちついた人々が構成員であつた。従つて、それらの郷邑社会は、その地の所謂在地勢力とは関係のない人々からなり、後漢末期の中央官僚社会と同様に、その生活のすべてを中央権力に依存する人々によって構成されていたといえようである。すなわち、隋唐時代となると、これらの郷邑社会もまた、寄生官僚社会であつたといえよう。

私はこの論文においては、羅振玉氏編「芒洛冢墓遺文」(嚴耕望編「石刻史料」所収)によつて、隋唐時代の河南府中心の地方郷邑社会の実態について考えてみたい。

まずはじめには、この河南、洛陽地方にうつり住んだ家々の郡望或は旧望を明らかにすることによつて、それらの人々が全国各地からこの地に移住・定着したことを証明し、次にそれらの家々が移住とともに本貫をも移して、完全にこの地の人となつたであろうことを推定し、さらに、移住定着した家々の間における婚姻関係をみることによつて、この地方に、

それらの人々による社会生活圏―新しい郷邑社会―が成立していたことを考えてみたい。

第一節 全国から移住の家々

さて、この河南府の地方に、隋唐時代にどのような家々が移住していたのであろうか。いま、「芒落冢墓遺文」(以下「遺文」と略称する)に収められた墓誌銘のうち、郡望あるいは旧望の明らかな家々のごく一部をあげれば、次の如くである。

河内	郡望	司馬元礼墓誌	墓誌銘
南陽		楽達墓誌	
魯国		顔人墓誌	
彭城		劉澄墓誌	
清河		崔氏墓誌	
河東		裴坦墓誌	
渤海	郡望	高知行墓誌	墓誌銘
北地		傅氏墓誌	
呉郡		孫通墓誌	
江夏		費胤斌墓誌	
安定		皇甫德相墓誌	
河東		柳永錫墓誌	
武威	郡望	段濟墓誌	墓誌銘
蘭陵		蕭瑤墓誌	
滎陽		鄭誼墓誌	
上谷		寇遵考墓誌	
潁川		陳諸墓誌	
隴西		李和墓誌	
呉郡	郡望	陸大亨墓誌	墓誌銘
会稽		賀玄道墓誌	
呉興		丘興墓誌	
鉅鹿		魏和墓誌	

これらは「遺文」にみえるごく一部の人々についてみたにすぎぬのであるが、この限りでも、河南・洛陽に近い地方の出身の人々から、遠方の土地の出身の人々まで、さらには、江南の郡望の人々までに及ぶ、全国的な拡がりをもつ人々の集中がみられる。勿論、この河洛の地に移住してくる前に、すべての人々がその郡望の地に居住していたとは、必ずしもいえないかも知れぬ。郡望は、元来先祖の発祥の地であるから、現実には、その地を離れて、別の新しい居住地に本貫を

つけていたことも多かったであろうし、⁽³⁾ その新しい土地から河洛の地に移住したという場合も多かったに違いない。例えば、張行滿墓誌によれば、

「洛州洛陽人也。……因官望於清河。源發宗於白水。」

とみえるが、これは、現在の本貫（新望）は洛陽につけられ、洛陽人となっているが、元來は「南陽白水」がその郡望（旧望）であり、清河がその次の望であったことを示すと思われる。すなわち、張行滿の家は元來は南陽張氏に属したが、ついで清河張氏となり、現在は洛陽の人となっている、ということになる。⁽⁴⁾

しかし、たとえどういふ事情があつたとしても、河洛の地におちついたこれらの人々は、結局は他の地域から此処にうつり住んだ人々であることに変わりはない。彼等は、河洛とは全く縁のない地方から、何等かの事情によつてこの地に移住し、定着した人々であつたわけであり、この当時、河洛に定着していた人々のうちに、全国からやつてきたと考えられる人々があつたことに異論はないであろう。

さて、この「遺文」の中で、墓誌の数の多いものをあげてみると、蕭氏は七面、劉氏は五面、鄭氏は七面、鄧瑯王氏は七面、清河崔氏は八面、郭氏は七面、隴西李氏は一八面、清河張氏は一〇面、董氏は五面、韋氏は五面、賈氏は五面、趙氏は七面以上、趙郡李氏は九面、南陽張氏は一八面、楊氏は一九面、太原王氏は三一面、盧氏は五面以上などである。これによれば、この地には全国から移住してきたといふものの、やはり近い地域の郡望をもつ人々が多かったことは争えない。弘農の楊氏とか、南陽の張氏、清河の張氏、崔氏などはそうであろう。しかし、それほど近いわけでもない太原の王氏や、遠方である隴西の李氏などが、圧倒的に多いことも注目されよう。このことは、移住・定着ということには、前にもふれたように、必ずしも郡望の地から直接にこの地にうつつたとはいえない場合も多かったであろうことと同時に、単に地理的な遠近に左右されない理由、例えば政治的・社会的理由などがあつたのではないかを思わせるものがある。

とに角、この河洛の地に移住・定着した人々が、全国から、地理的条件にそれほど左右されることなくあつまつたといふことは、この地が社会的な意味で、全国的性格をもっていたことを示しているといえよう。ところが、このような性格は、別に河洛の地にのみみられる特殊なものではなく、実は隋唐時代においては、どの地方においてもみられた通常一般のもので、そのことは既に前論に指摘したところである。従つて、何故に隋唐時代に及んで、このような性格を地方郷邑社会がもつようになったのかを、検討してみる必要があると考える。

さて、これらの人々は、何時頃からこの河洛の地に移住したのであろうか。いま、それについての材料を摘出してみよう。

出典	記	事	移住時期
王朗夫婦墓誌銘 同上	(太原晋陽人也)「父榮因宦成周。遂居于洛」 夫人魏氏(鉅鹿中山人也)「父彥因宦洛邑。遂家于三州」	父 父	父 祖・北齊
王玄墓誌 處士王義墓誌	(其先、太原晋陽人也)「祖在齊之日。□宦洛陽。情貴神州。遂家於此」	高祖以後、西魏以後	隋末、本人
王文晁墓誌	(太原祁人也)「洎有隋靈亂。天下崩離。……爰居偃師。故今為縣人矣」	高祖、北魏	不明
王嘉墓誌	(太原人也)「高祖高尚書右僕射。隨魏氏遷于洛邑。因即家焉」	本人	三代祖
王訓墓誌	(其先弘農華陰人也)「君……遂居河南洛陽焉」	本人	四代祖、北魏
楊神威墓誌	(其先南陽白水人也)「三代祖徙居於洛。故今為洛陽縣人也」	本人	高、曾祖
張安都墓誌	(南陽人也)「四代祖寬、後魏因官。今家洛陽焉」	本人	本人
張貞墓誌	(河間鄭人也)「政……自河朔家於洛陽」	本人	本人
邢政墓誌銘	(本鴈門郡)高曾因官。今為河南武臨人也」	本人	本人
田嵩墓誌銘	(并州武鄉人)「波……以旧族豪家。遷于洛邑」	本人	本人
張波墓誌銘		本人	本人

劉夫人墓誌
郭恩訓墓誌
郭壽墓誌
寂奉叔墓誌銘
王惠墓誌
張夫人墓誌
何氏墓誌銘
王素臣墓誌銘
劉庭訓墓誌銘
譚伍墓誌
傅叔墓誌
李強墓誌
程隋墓誌
董夫人墓誌
□信墓誌
貞隱子墓誌

(夫人李氏、隴西成紀人也)「祖信……遂家于河南。為洛陽人也」
(太原平陽人也)「父敬同徙居洛陽。今為洛陽人也」
(太原人也)「(父)貴」遂嫁洛州偃師縣龍池鄉安教里也」
(上谷昌平人也)「反葬於河陰縣之芒山。(曾祖)河南宣穆公之墓次」
(瑯琊臨沂人也)「遷柩於洛水北邙。合葬于宣簡公之旧域」
(洛陽人也)「祖父從宦。因家於此焉」
(太原人也)「遠祖因官。今家洛陽焉」
(中山人也)「(素臣)秩滿。寓居襄城莊。臨潁水。……有終焉之志」
(沛國豐人也)「(劉)哲仕晉為河南尹。封新城侯。子孫因家焉。今為河南伊闕人也」
(恒山羣千人也)「以大業歲。爰居洛陽。日往月來。因家於此」
(北地靈州人也)「隨大業中。遷都洛陽。因而家焉」
(河南人也)「自晉室南遷。君祖歸北。魏文都洛。附家焉」
(廣平曲安人也)「考念、隨季因官洛陽。遂家於河南焉」
(□州望江人也)「陳氏淪喪。國破家亡。蓬軫汧浮。流離聲洛」
(河南脩武人也)「考隨伊闕令。子孫因家焉。今為洛陽人也」
(本太原祁縣)「大業璽因官徙于洛京。今為緱氏人也」

祖
父
父
父
曾祖以前
祖以前
祖父
遠祖
本人
晉
隋、本人
隋、本人
北魏、遠祖
父
隋、父
隋、父
隋、本人

この表によるに、父の代に河洛に移住したとするもの七、本人が移住したとするもの七、遠祖、祖父以前とするもの一三、その他に不明のものがある。時代的にみれば、かなり古い時代から隋唐に及んでいる。すると、この地への移住・定着は、古い時代から行われていたことはいまでもないとしても、父や本人の代のものが、祖以前のものとほぼ同数であることは、やはり移住が、時代が下るにつれて強まる傾向であったことは否定できないようである。勿論ここにあげたものは、移住時期の推定できるものにすぎず、「遺文」の中には、これらの外に移住時期の推定不可能な多数の墓誌銘があ

る。しかもその数は、上述したものの十数倍にも及ぶものであるから、上表のみによつては、必ずしも断定的なことは言い難いといえないこともない。

このように、時代が降るにつれて、祖先伝来の郡望の地、或は郡望の地から移住して定着していた旧望の地、そういう本貫の地からこの河洛の地に移住・定着する人々がふえてきたらしいが、勿論そのような移住・定着が昔から行われたことについては、既に指摘したことがある。⁽⁶⁾ただ、時代が降るにつれて、そのような傾向が強まってきたかに思われるについては、それなりの理由があった筈である。

しかし今は、そのことにふれる前に、これらの移住者の定着の問題について考えておきたい。

第二節 移住と定着

さて、この河洛の地に移住した人々は、果してこの地の人になり切っていたのであろうか。いま墓誌銘に表現されている出身地についての記述の仕方をみるに、大体次の三つに区分できる。

第一には、郡望のみを記すもの。

第二には、郡望を記してはいるが、現在はその地に定着しているわけではないことを記すもの。

第三には、現本貫地を明らかにするもの、但し、郡望にふれる場合と、全くふれない場合とがある。

いうまでもなく、「遺文」に収録されている墓誌銘は、この河洛地方に墓地をもつていた人々のものであるから、一般的にいつて、これらの人々はこの地方で死亡し、この地方に墓地を設けていたものである。従つて、その現実の生活の場は河洛の地であつた、と考えてよからう。上述の第三の場合は、これらの移住者達の中に、この地方で生活し、この地方

で死亡し、この地方に墓地を設けたところの、この地を本貫とする人々のあったことを明示しているといえる。ところが、この地方で生活し、死亡しながら、その墓誌には、第一、第二の場合の如き記述しかみえない人々もあったのであるが、それらの人々は、果してこの地を新しい本貫地、新しい故郷と定めていたのかどうか、疑わしくもないということになるう。

このような疑問を明らかにする為に、まずこれらの墓誌にみる出身地の表現が、どのように記されているかの具体例を示してみよう。ただ煩をさける為に、弘農楊氏、太原王氏、南陽張氏を例としてあげたい。

○弘農楊氏の場合

第一に属するもの

「弘農緱氏人也」(楊岳墓誌)

「弘農仙掌人也」(楊宝墓誌)

「弘農華陰人也」(楊貴墓誌、楊芸墓誌、毗沙妻楊玉姿墓誌、竇夫人楊氏墓誌銘、楊厲墓誌銘、楊士墓誌、楊道綱墓誌)

「弘農人也」(楊居墓誌)

「弘農楊公」(楊崇墓誌銘、楊夫人墓誌)

第二に属するもの

「漢太尉震之後也。家本弘農。因官徙居於此焉。」(楊師善墓誌)

「弘農人也。……因□□播。遂居洛陽焉。」(楊軌墓誌)

「其先、弘農華陰人也。……遂居河南洛陽焉。」(楊神威墓)

第三に属するもの

「夫人楊氏、弘農華陰人也。今寄貫洛陽縣焉。」（郭君夫人楊氏墓誌）

「洛州□縣人也。漢楊太尉後。」（楊承胤墓誌）

「洛陽人也。其先漢太尉震之後。」（楊昭墓誌）

「河南洛陽人也。其先漢太尉伯起之後。」（楊順墓誌）

「河南人也」（楊大隱墓誌）

○太原王氏の場合

第一に属するもの

「太原王氏」（劉夫人墓誌）

「太原人也」（劉夫人墓誌、王怡墓誌、王詢墓誌、王儉墓誌、王令墓誌、夫人王氏墓誌、王君墓誌、王寬墓誌銘）

「（北海）太原人也」（王玄墓誌）

「并州太原人也」（王夫人墓誌銘、王和墓誌銘）

「太子喬之裔也」（王留墓誌銘）

第二に属するもの

「其先太原人也」（王爽墓誌、王慶墓誌、王才墓誌）

「先太原人。歷代徙任。因于茲焉。」（王訓墓誌）

「太原人也。高祖……随魏氏。遷于洛邑。因即家焉。」（王嘉墓誌）

「其先太原晉陽人也。祖在齊之日。因宦洛陽。……遂家於此。」（王玄墓誌）

「其先太原晉陽人也。因官遂居於洛州洛陽縣焉。」（王侁墓誌銘）

隋唐時代の上層郷邑社会（そのⅡ）

「太原晋陽人也。……因宦成周。遂居于洛。」（王朗夫婦墓誌銘）

第三に属するもの

「太原人也。因官宅土。今為河南人□。」（王岐墓誌）

「太原祁人也。……爰屈偃師。故今為縣人矣。」（王文暉墓誌）

「太原祁人也。今貫偃師縣龍池鄉焉。」（王纂墓誌）

「太原人也。今貫居陽城焉。」（王達墓誌）

「太原人也。……因官徙地。家於河南。故又為縣人焉。」（王行淹墓誌銘）

○南陽張氏の場合

第一に属するもの

「南陽西鄂人也」（張洛墓誌、張義墓誌）

「南陽人也」（張銓墓誌、張鍾葵墓誌）

「南陽白水人也」（段夫人張氏墓誌、張欒墓誌銘、張対銘、張滿墓誌銘、張夫人墓誌）

第二に属するもの

「其先南陽白水人也」（張素墓誌）

「其先南陽人也。因官出守。遂家于此地焉。」（張客墓誌）

「南陽人也。……今家洛陽焉。」（張貞墓誌）

「本南陽西鄂人也」（張信墓誌銘）

「其先鄧州南陽人也」（張昌墓誌）

第三に属するもの

「南陽白水人也。……因官遷転。遂為洛陽縣人焉。」（張傑墓誌）

「其先南陽白水人也。三代祖徙居於洛。故今為洛陽縣人也。」（張安都墓誌）

「洛州洛陽人也。……因官望於清河。源發於白水。」（張行滿墓誌）

ここにあげたのは僅かに楊、王、張の三氏のみについてであるが、これらは河洛の地に移住した家々の間では、多くの人数を擁しているほうであるから、当時の墓誌銘の表現形式をみるのには、一応十分とみてよいであろう。さて前にのべた如く、第一に属するものは祖先伝来の郡望のみをあげ、第二に属するものは、既に郡望の地にはいないことを示すのみの場合と、更に郡望の地から別の場所に移住したことを明記する場合とがあった。何れも祖先伝来の地を離れていることは明らかであるが、前者は何処に移住したかを明示せず、後者はその移住地を明記しているわけである。この場合注意せねばならぬのは、例えば王氏について「其先太原人也」という表現の場合と、「先太原人也」という場合と、単に「太原人」とのみある場合、更に張氏について、「本南陽西鄆人也」という場合とがあったことである。「其先」「先」「本」とある時は、明らかに「昔はそうであったが、今はそうではない」の意ととるべきであるが、単に「太原人也」とのみある場合でも、そのあとの現住所に関する記述からみて、第二の場合とみるべき場合、換言すれば「其先太原人也」と同じ意味をもつと解すべき場合があったといえる。

第三に属するものは、単に移住したというだけではなく、既にその地に本貫（新望）をつけ、その地の人となっていることを示している。

従って、第一に属するものは、なお郡望にとらわれた表現であるとしても、第二、第三に属するものは、既に郡望を過去のものとして取扱っていることを示しているといえよう。ところが以上の例によっても明らかなく、第一に属する例

は三四例（楊氏十二例、王氏十三例、張氏九例）で極めて多い。ただ、第二第三に属するものを一つのグループと見得るとすれば、合計して二九例であつて、第一の郡望のみを記すものと、郡望にとられない表現とは、大体相半ばすると考えてよいのではあるまいか。

ところで前述したように、これらの人々の現実の生活の場は、すべて河洛の地方であつたはずである。しかし、その墓誌銘にみる出身地の記述が以上のようなものであることは、移住していても一時的なものにすぎず、ここを生活の根拠地||本貫としていたわけではない人々も、かなり多かつたのではないかと疑問がこころう。では、これらの人々はこの河洛の地と、どういふかかわりをもつていたのであらうか。

いまこの問題をほりさげてゆく場合、どのようなことについて考えればよいであらうか。私は嘗て本貫の移動について考えた時、まずその基準とすべきものは、墓地の所在地であらうとした。⁽⁸⁾ただ、時には墓地と本貫とが分離して、所謂故郷の分裂が起ることもあり得たようである。このような考え方に従つて、「遺文」にみえる人々、特にその出身地として郡望のみしか記していない場合や、移住しても果して移貫定住したのかどうか明らかでない場合などを中心として、彼等の移住は、果して本貫をそこに移したものであつたのか否かについて考えてみたい。

○弘農楊氏の場合

第一に属するもの

出典	生活の場	墓	地
楊道綱墓誌 楊藝墓誌 楊貴墓誌	終於立行里私第 卒於清化里之私第 終於（脩義里）私第	殯於邛山之陽、礼也。 遷窆于北邙之、礼也。 葬於邛山、礼也。	

楊宝墓誌	終於洛陽縣里第	葬於洛北邙之原。
楊岳墓誌	卒於立行里私第	殯於河南合宮縣北邙山、礼也。
楊崇墓誌銘	(不明)	啓窆於先塋、與故夫人隴西竇氏、合葬於洛陽北原、礼也。
楊居墓誌	(不明)	窆於村西二百步(祖)彌墓之後、二昆之傍。
楊士墓誌	(卒於官舍)	葬於北邙之原。
楊夫人墓誌(夫人源氏)	終於尊賢里之私第	婦葬邙山、礼也

この表で明らかのように、これらの人々の多くは洛陽県の私第で卒している。ということは、その生活は洛陽県を中心
に営まれていたということであろう。勿論、ここにみる限りでは不明のものもあるし、任地の官舎で卒した人もあるが、
それらの人々と雖も、恐らくは洛陽付近に生活の場をもっていたと推定して誤りあるまい。というのは、これらの人々は
殆どその墓地を邙山(北邙山)に設けていたからである。墓は故郷に設ける、墓地の所在地こそ故郷であるということであ
れば、彼等にとって、この洛陽の地こそ生活の場でもあり、故郷でもあったであろう。

あとから述べるところで明らかになるが、洛陽、河南の地方にいた当時の官僚達は、殆どこの北方丘陵地帯北邙山(邙
山)の地にその墓地を設けていた。楊氏の家々もまたそうであったといえよう。従って、彼等は実際の生活を洛陽城中心
にもっており、墓地は北邙山の原に設け、本貫を河洛の地につけていた、と考えて大過ないのではあるまいか。

このような推定をたしかなものと考へうる根拠は、楊崇墓誌や楊居墓誌にみられる。楊崇墓誌によれば、その墓地は先
祖伝来の墓地であり、楊居墓誌によれば、少くとも祖先以来の、兄弟も共に葬られている一族の墓地であった。すなわち、
この二人については、その墓地は何代か前からの墓地であったわけであり、そのことは、彼等の祖先が早くこの地に移住
し、この地に定着していたことを示すものであろう。したがって、彼等の本貫もまた、この地につけられていたと考えて
誤りないであろう。

もし、楊崇、楊居についてこのように考えうるとすると、他の人々においても、すべてがそうであったとは断定でき難いとしても、大方は父祖伝来の墓地をもつていた、と考えてもおかしくないであろう。したがって、これらの人々もまた洛陽城付近に居住し、父祖伝来の墓地をもち、その墓地に葬られたのであらうと考えられる。ということは、彼等の墓誌には郡望のみしか記してないとしても、現在は洛陽付近で生活しているわけであり、しかもその洛陽付近は、必ずしも一時的な生活の場にすぎなかったとは言えないことを証するものであらう。彼等の父祖伝来の墓地が設けられている以上、むしろ彼等の本貫はここにつけられ、この地こそ彼等の故郷であつた、と見るべきではなからうか。

例えば、前稿⁽¹²⁾で指摘したように、「新平郡人也」(馮名墓誌⁽¹³⁾)とその墓誌の本文で記されている人物でも、墓誌そのものは、「大周上党郡馮名墓誌銘」と題されているので、その本文には出身地として郡望(新平郡)のみを記していたとしても、現実には上党郡に本貫をつけていたことを明らかにしているわけである。このことは、郡望のみを記すにすぎぬ上述の楊氏についての、前述の推定を支えるものがある。

このような推定の正しさは、第二、第三の場合をみることによって、更にたしかめられるはずである。
第二に属するもの

出典	生活の場	墓	地
楊師善墓誌 (夫人丁氏) 楊軌墓誌 楊神威墓誌	(卒于軍所) 終於西京長興里 (卒於官舎) 終於故里	旋窆於合宮之界 遷祔于北邙之旧塋、礼也。 殯於芒山。 殯于北邙原。	

楊師善墓誌によれば、師善は若くして戦地に卒したが、妻丁氏は長命で西京長興里に卒した。丁氏が西京で卒したのは、

その子慎が雍州明堂県尉となったので、それについて行つたからと思われる。しかし彼の家の墓地は北邙山にあったので、その伝来の旧塋に帰葬したものと考えられる。前述したように、師善の出自については、「家本弘農。因官徙居於此焉。」といわれているが、この場合の「此」は、合官県（河南縣）近辺と考えられるから、ここが新しい定着の場であり、その新しい本貫であつたと考えられる。

楊軌の場合は任地で卒したから、現実の生活の場は明らかでないが、彼の一家は前述のように、「遂居洛陽焉」といわれていることからみて、生活の根拠地は洛陽であつただろう。彼も亦芒山（北邙山）に葬られている。

楊神威は故里で卒したとあるが、彼については、「遂居河南洛陽焉」（前述）といわれているから、洛陽に本貫をうつし、そこに定住していたとみてよく、故里というのは洛陽をさすと考えて誤りあるまい。その墓地もまた北邙山の原であつたのである。

このようにこれらの人々の現実の生活の場は洛陽付近にあり、その墓地は同じく北邙山の原に設けられている。このことは、彼等がこの地に移住定着し、ここを本貫とし、ここを故郷と考えていたことを証するものであろう。

第三に属するもの。

出典	生活の場	墓	地
楊承胤墓誌 楊大隱墓誌 楊昭墓誌 楊順墓誌	遘疾於永昌縣韋善坊私第 終於清化里第 終於思恭之里 終于道光里第	葬於邙山之平樂鄉之原、礼也。 遷窆於城北平樂里之原、礼也。 葬于北邙平樂之南原。 遷窆於邙山、礼也。	

この中で、楊昭、楊順の二者は、明らかに「洛陽人」（前出）と記されているから、洛陽に定着し、本貫をつけ、ここで

生活し、北邙の原に墓地を設けていたといえるわけである。楊大隱については、「河南人」(前出)とあるが、これが河南県を意味するのか、河南府を意味するのかは明らかにできない。楊承胤については、前述のように県名が明らかでない。しかし、この二人もまたその墓地は北邙山の原に設けており、その生活も洛陽付近でなされていたことは確実であるから、以上の四人がすべてこの地方に本貫をうつし、生活をしていたことは誤りない。

また、表にはあげなかったが、「郭夫人楊氏墓誌」によれば、「今寄貫洛陽県焉」(前出)とみえているから、夫人の生家は完全に洛陽に本貫をうつしていたと考えられる。ただこの家についてはその他のことは判らない。

以上によれば、第三に属するものは勿論、第二に属するものも、河洛の地に定住し、墓地を設け、本貫をつけていたこと明らかで、彼等の祖先の発祥地である弘農郡とは、全く関係のない生活を送っていたことが考えられる。これからみれば、第一に属するものと雖も、河洛の地に生活し、そこに墓地を設けていたのであるから、この地に定着していたこと明らかであり、従つてこの地に本貫をうつしていたと推定され、その郡望とは関わりのない生活を送っていたと考えてよいであらう。

○太原王氏の場合

次に、太原王氏について考えてみよう。

第一に属するもの

出典	生活の場	墓	地
王怡墓誌 王頴墓誌 王詢墓誌	終於集賢里之私第 終於蜀郡之私第 卒於私第	殯於河南府河南縣平樂鄉張陽里之北原、礼也。 歸柩於洛城、窆於城北河南縣平泉鄉之原、礼也。 合葬於洛陽城北十里芒山之原、礼也。	

王玄裕墓誌	終於德懋里之私第	葬於北邙山合宮縣平樂鄉之杜鄭村東北原、礼也。
王儉墓誌	終於洛陽立行坊之里第	合葬于北芒山之平原、礼也。
王令墓誌	終於私□	合葬於芒山之原、礼也。
王立墓誌	終於延福之里舍	招魂合葬於邙山之陽翟村西二里、礼也。
王君墓誌	奄從私第	窆於北邙……與妻張氏合葬洛州邙山之上。
王留墓誌銘	卒於里第	改塋於伊陽里西一里、與夫人張氏合葬、礼也。
王和墓誌銘	終於私第	與君合葬於河南界邙山之陽、從遺令也。
王寬墓誌銘	卒於私第	窆於北邙之里、礼也。
王護墓誌銘	終於洛陽私第	合葬邙山、礼也。
王贊墓誌	終於隣德里	合祔於芒山平樂鄉之原、礼也。

いうまでもなく、これらの人々はその出自については郡望のみしか記していない。しかし、いまその生活の場についてみると、殆どの人が私第に卒したと記されている。勿論、その私第の所在地が必ずしも明記されているわけではないが、王怡、王玄裕、王儉、王立、王護の場合は、明らかに洛陽県であるから、他の人々も、その墓地の所在地と考え合せて、大方は洛陽或はその周辺であったとしても無理ではなからう。ただ王頴の場合は「蜀郡之私第」とあるから、或は官僚として蜀郡に赴任していたかも知れぬが、これとても洛陽に帰極し、河南県に窆つたとあるから、郡望たる太原の地ではなくて、この河洛の地こそ帰葬すべき土地と考えられていたことを示している。

一方、墓地についてみるに、多くの人々が北邙山の原或は河南県界に葬られていることからみて、恐らくは河洛の地に墓地を設けていたであろう。ただ、この太原王氏の場合、楊氏の時にみた「先塋」とか「旧塋」とかの如き用法が見えないことから、これらの墓がいわば先祖伝来のものか否かについて、はっきりしたことはいい難い。しかし、王氏の場合も恐らく楊氏の場合と同様に、旧墓も多かったのではあるまいか。

いまその点について考えてみるのに、一般に太原王氏の墓地に関する記述は、「寔於北邙之原、礼也」というような形式をとっている。この「礼也」という表現は、そうすることが当然古来の礼にかなうものであるから、その故にそうなされたものである、という意味を現わしていると考えられる。このような、葬に關して「礼也」といわれる場合は、故郷に帰葬された時に用いられたといえよう。というのは、先祖伝来の墓地に帰葬することこそ、中国の伝統的礼であるという考えは、例えば晋書(82)陳寿伝に明らかである。¹⁴⁾陳寿伝によれば、彼は母の遺言に従って帰葬しなかったが、母の遺言に従つたとしても、帰葬しなかったという点をとがめられて、郷党の清議にかけられたといわれている。従つて、「葬于某地、礼也」という表現がとられている場合、その某地は先祖伝来の墓のあるところであり、故郷であつたと考えてよいであらう。

こう考えてみると、この第一に属する太原王氏の場合、殆ど「礼也」と記してあることからみて、旧墓がこの河洛の地にあつたわけであり、これらの人々は何代も前からこの地に生活し、ここに墓地を設け、ここを故郷としていたと考えられるのである。

ただ王和墓誌銘によると、「從遺令也」とみえ、宛も遺令によつて始めて此所に墓地が設けられたかの如くにもみえる。しかし墓誌によれば、和は乾封二年九月七日に死んだが、夫人隴西李氏は、その前年乾封元年十月十七日にすでに卒していた。それで嗣子の質は、乾封二年十月廿二日に和と夫人とを合葬したのであるが、「遺令」というのは、既に卒して別に葬つてあつた夫人を和と合葬せよというものであつたと思われる。この時新しい墓地を設けよという遺令ではなかつたであらう。

以上のように考えてみると、これらの王氏については郡望しか記していないにしても、それは單なる形式にすぎず、實際には河洛の地に定住し、北邙山の原に父祖伝来の墓地を設けていたのであるから、この地こそ彼等の故郷であり、現在

の本貫地であったといえよう。彼等は最早太原の人ではなく、河洛の人であったといふべきである。

第二に属するもの

次に第二に属する場合について考えてみよう。

出典	生活の場	墓地
王爽墓誌 王訓墓誌銘 王嘉墓誌 王慶墓誌 王玄墓誌 王朗夫婦墓誌銘 王才墓誌 王侁墓誌銘	終于東京脩義里之私第 終于桂陽官舍(夫人)終于履道之私第 終於私第 沒於清化里第 奄於私第 終于景行里第 卒於家 (葬於橫陣)	(不明) 合葬於邙山之麓、礼也。 合葬於洛州合官縣北邙山之平原、礼也。 權葬於北原、礼也。 葬於河南縣平樂鄉北邙之山。 合葬於邙山翟村之西一里。 葬於北邙之山。 遷窆於洛陽縣之北邙山之北原、礼也。

まず生活の場についてみるに、任地の官舎や、軍陣に死んだ人達以外は、恐らく河洛の私第で生活し、そこで卒したものであろう。

一方墓地は、王爽を除いてすべて北邙山の原に設けられている。ということは、これらの人々は、通常の生活は河洛の地でなされ、墓地は北邙山にあったということになる。しかもこれらの人々は前述した如く、既に太原の人ではないのであり、「遷于洛邑。因即家焉。」とか、「因官洛陽。……遂家於此。」(何れも)とみえるように、この河洛の地に定住していたのであり、この地に本貫を移していたであろう。従って、これらの人々は河洛に定着し、ここに墓地を設け、ここを故郷としていた人々であったと考えてよからう。

第三に属するもの

このグループに属する人々は、前述した如く、すべての人々が、「太原人」と明記している。ということは、これらの人々は元来は太原を郡望とする王氏に属しながら、しかし、今は河洛の地に本貫をうつし、この地の人となっていることをも明記しているわけである（前述）。

では、これら本貫を河洛の地につけている場合、生活の場、墓地はどこにあったものであろうか。

出典	生活の場	墓	地
王岐墓誌 王文晁墓誌 王纂墓誌	終于漁陽官舍 終于私第 終於長安	合葬于北邙山之平樂鄉界、礼也。 權窆于邙山之陽、礼也。 權葬於邙山之陽。	
王達墓誌 王行淹墓誌銘 處士王義墓誌	（夫人）終於積德坊 終于景行坊私第 終於景行里之第 卒於荆南之野	（夫人）葬於邙山之陽。招魂與君合葬於邙山之陽、礼也。 殯於北邙之陽、礼也。 殯於河南縣平樂鄉之原、礼也。 歸葬於河南之北山之陽、礼也。	

この表によつてみる限り、これらの人々は特別の事情のないかぎり洛陽の私第で卒しているから、生活もまた洛陽の地でおくられていたと考えられる。しかも、彼等の墓地はすべて河南縣平樂郷の北邙山の原に設けられていることからみて、たとえ他の地で卒することがあったとしても、河洛の地に帰葬したのであり、この地こそ彼等の故郷であり本貫であつたことを示すものといえよう。

ただ王義の場合は多少事情があるようである。その墓誌をみると、

「太原晋陽人也。高祖毅入仕西魏。家于京兆。又為京兆人焉。」

とみえている。すると、郡望の地をはなれて新しい本貫を設けていることは、他の人々と同様であるとしても、その本貫は京兆であつて河洛の地ではなかつたと考えられる。しかし、彼の墓誌が「遺文」に含まれていることは、その実際の生活の場が既に河洛の地にうつていたことの証であろう。しかも、何かの事情で荊南の地で卒したとはいえ、その墓地について、「帰葬於河南之北山之陽、礼也。」とみえるのによれば、彼以前に既にこの一家の墓地は北邙山の原に設けられていたのであり、そこに彼もまた帰葬されたということになる。ということとは、彼の本貫は或はなお京兆につけられていたとしても、その生活の場、その墓地は既に河洛の地に移つていたわけであり、これは所謂故郷の分裂といふべきであろうが、しかし、やがては河洛の地が新しい本貫となつたことであろう。彼の場合、郡望（旧々望）から京兆（旧望）へ移り、更に河洛（新望）への本貫移動の直前にあつていたといえるのであろう。

以上によつて明らかな如く、これら太原王氏の人々は、その出自の表現に相違はあつても、すべての人々がこの河洛の地に住み、この地に墓地を設け、この地に本貫（新望）をつけていたと断じてさしつかえないであろう。

○南陽張氏の場合

第一に属するもの

例によつて表をつくると次のようである。

出典	生活の場	墓	地
張滿墓誌銘 張対銘 張業墓誌銘 張洛墓誌	終于私第 （不明） 卒於私第 終於洛邑□	殯于北邙山、礼也。 殯於龍門西平原、礼也。 合葬於河南於平樂郷邙山之原、礼也。 遷窆於□南□平樂郷邙山之平原。	

張義墓誌 張鍾葵墓誌 張銓墓誌	卒於私第 家在洛陽 終於殖業里	遷合葬於北邙之原、礼也。 合葬於洛北邙。 葬于北邙山平樂鄉之原、礼也。
-----------------------	-----------------------	---

これによれば、私第に卒した者三、洛陽に卒した者三、不明一となる。この「私第」が何処にあったかは速断できないにしても、大方は河洛近傍であつたであらう。その墓地は、北邙山或は龍門とあるから、これをあわせ考えれば、これらの人々は洛陽及びその近くに生活し、この地に墓地を設けていたといえるであらう。しかも、これらの墓地は、前にもふれた如く、「礼也」というその表現からみて、父祖伝来のものであつたと考えられる。

第二に属するもの

前述したように、これに属するものは、「其先」とか、「本」とかをその郡望にかぶせて記し、その先祖は昔は南陽の人であつたが、現在はそうではない、他の地に本貫をつけているものである、という人々であつた。ただ張貞の場合（前述）のように、単に「南陽人」と記すのみであつても、内容的には「其先」や「本」を省略したと思われる場合もある。いまこれらの人々の表をつくれれば次の如くである。

出典	生活の場	墓	地
張信墓誌 張素墓誌終 張客墓誌 張貞墓誌 張昌墓誌	終于私第 終于思恭里之私第 （夫人）終于積德里之私第 終於私第 終於時邕里之第 終于洛川里	葬於洛陽城北拾伍里之原、礼也。 合葬于北邙平樂鄉之原、礼也。 合葬于邙山之南原、礼也。 合葬於河南縣漣澗鄉邙山之陽、礼也。 葬於邙□之山。	

このうち張素、張貞は共に洛陽の私第に卒したのであるが、張信や張客の場合は単に私第とあるのみで明らかでない。張昌の洛川里というのは、その墓碑に、「洛州洛陽縣張處□□誌」とみえるから、洛陽城内の里であろうか。すなわち、張昌は南陽から洛陽県に本貫をうつし、この地の人となっていたのであり、墓地もまた北邙山に設けられているのを見れば、完全にこの地の人となっていた筈である。その地の人々も、すべて墓地が北邙山或は城北に設けられていることからみて、張昌の場合と同様であつたであらう。

第三に属するもの

これに属する人々は、すべて明らかに洛陽県に本貫をつけ、南陽から洛陽に移住した人々であつた。

出典	生活の場	墓 地
張保墓誌 張安都墓誌 張行滿墓誌	卒于私第 終于私第 卒于家	(夫人)與君合葬于北邙之陽、礼也。 葬於芒山之陽。 殯於洛城之北邙嶺之陰十五里、千金郷之地、礼也。

ここにみる私第や家は、すべて洛陽県の私第と考えてさしつかえあるまい。その墓地は代々北邙山に設けられていたと考えられる。張安都の場合は、三代の祖が洛陽の地に移ってきたのであるから(前述)、それ以来の墓地であつたといえよう。

さて張行滿の場合、勿論現在洛陽の人であり、ここに生活し、且つ葬られたのであるが、前述した如く墓誌銘をみると、「元来は南陽白水の出身ではあるが、官僚として清河に赴任し、そこを本貫としていた」と述べているので、彼にとつては郡望(旧々望)としての南陽、旧望としての清河から、ついで洛陽(新望)におちつき、この地の人となつたといえる。他の人々の場合も、恐らくはこれと相似た過程をへて洛陽の人となつたのであらう。

以上、弘農楊氏、太原王氏、南陽張氏についてみてきたが、それらを通じていえることは、第二、第三の出身地の表現形式に属する家々は、完全に河洛の地に生活し、墓地を設け、本貫をつけ、そこを故郷としていたのであるが、第一に属するものであっても、第二、第三の場合と全くかわらないことが明らかである、といえることである。 ということは、「遺文」に墓誌の収められている人々は、すべてこの地を本貫とし、ここを故郷としている人々であった、といえるわけである。

このように結論づけることの正しさは、「遺文」に収められた墓誌に一々あたってみることで確かめられ得るし、そのような手続きを筆者は行つたのではあるが、それらをここに記すことは煩にたえないので省略する。

第三節 婚姻関係の成立

さて、第一節、第二節によつて、河洛の地に、全国から人々が集まり、この地で生活し、墓地を設け、本貫をつけ、ここを故郷としたであろうと考えた。では、これらの人々は、お互にどういう社会生活圏を構成していたのであろうか。私はこの地に集まつてきた人々の婚姻状態をみるによつて、ここに一つの新しい郷邑社会が成立したことを証することができると思う。以下、まず婚姻の具体例の一部を示すこととしよう。但し、その郡望の明らかなものの中から択ぶこととする。

I、滎陽鄭氏の場合

- (1) 李君夫人鄭秀実墓誌（李氏(5)参照）、(2) 鄭珣墓誌銘

夫人鄭氏

趙郡李氏
寶鼎縣令

瑤邵州刺史

前夫人
博陵崔氏

後夫人
太原王氏

女韋敬陵 + 女高輦海 + 女

李素孟十

韋瑱 + 女王珽 + 女裴河東 + 女崔博陵 + 女

夫人
博陵崔氏

榮陽鄭賓

夫人
榮陽鄭氏

+

河南元鏡遠
左武衛郎將

隋唐時代の上層郷邑社会（そのⅡ）

(5) 鄭瞻墓誌

○伯遠司徒左長史 — 子仁通直郎 — 植將作少匠 — 瞻東城縣令

密国侯尚書右僕射 — 蔣公淄州刺史 — 夫人 — 渤海封氏

II、清河崔氏の場合

(1) 崔恕墓誌

○隱甫東都留守 — 徵越州司馬 — 千里常州司士參軍 — 恕嶺南觀察使

正臣監察御史 — 夫人 — 鉅鹿魏氏
隴西李玄同

(2) 崔詹墓誌

○稱戸部員外郎 — 植商州防禦判官 — 承弼河南府士曹參軍 — 詹中事舍人 — 女

夫人 — 祭陽鄭氏 — 夫人 — 范陽盧氏 — 夫人 — 茫陽盧氏

(3) 崔夫人墓誌

○元綜黃門侍郎 — 令同陵州司馬 — 琚伊闕令 — 倬澤州刺史 — 亮美原令 — 夫人崔氏
隴西李氏 — 夫人 — 彭城 — 杜休源

(4) 崔志墓誌

○會仁 青州刺史
—— 志 息州長史
—— 義深 潞州都督府長史
+ 前夫人
+ 南陽張氏
+ 後夫人
渤海刁氏

(5) 崔府君夫人鄭氏合祔墓誌 (6) 參照

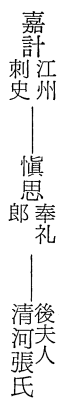
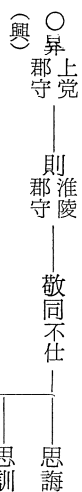
○祥業 范陽令
—— 湛 鄭州長史
—— 稔 懷州錄事參軍
歡 贈工部郎中
—— 珍芝 涑水令
—— 榮陽鄭氏 前夫人
+ 後夫人
澤 華州從事
—— 倓 夏縣令
—— 范陽盧氏 後夫人

(6) 崔程墓誌 (5) 參照

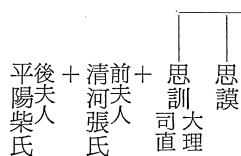
○祥業
—— 湛
—— 朝 懷州刺史
—— 程 河南縣主簿
長裕 潁川太守
—— 欽 殿中侍御史
—— 叔向 洛州司兵
—— 榮陽鄭氏 夫人
+ 稅 河南府參軍

Ⅲ、太原郭氏の場合

(1) 郭思謨墓誌 (2) 参照



(2) 郭思訓墓誌 (1) 参照



(3) 郭通墓誌銘

○達 本州
州都 略羽林
監 通沁源
縣令

+ 夫人
太原王氏

IV、趙郡李氏の場合

(1) 李珍墓誌銘 (2) 参照

○崗 永城
令 元善 襄州錄
事參軍 絳宰相 珍 河南府
錄事參軍

某 同州錄
事參軍 夫人 +
范陽盧氏

女 崔銘 錫山
尉 + 女 盧獲

(2) 李崗墓誌銘 (1) 参照

○希 滄州等
薨 四州刺史 …… 晉客 司農 貞簡 武臨
少卿 縣令 崗 永城
縣令

愛景 江陵府
參軍 夫人 +
太原王氏

(3) 王夫人李氏墓誌銘

○德盛 西城
郡守 義府右相 澤 桂坊 夫人李氏
司直

+ 太原王昕

(4) 李韜崔夫人合耐墓誌銘

○仁偉 東光 延祐 益府士 韜 隸王
令 曹參軍 屬

神慶 御史 夫人
大夫 瑤 光祿 清河崔氏

(5) 李方又墓誌 (鄭氏(1)參照)

○希礼 豫州 孝貞 黃門 来王 贈散騎 思諒 倉部 敬中 許王府
刺史 侍郎 常侍 郎中 參軍

陳 都水 昂 倉部員 胃 刑部 方义 宝鼎
使者 外郎 郎中 令

叔則 東都 約 洛陽 夫人
留守 主簿 鄭氏

V、范陽盧氏の場合

(1) 盧嶠墓誌、盧夫人崔氏墓誌銘

○安寿 錦州 正紀 汝州 抗 聞喜 嶠 永州
長史 司馬 令 司馬

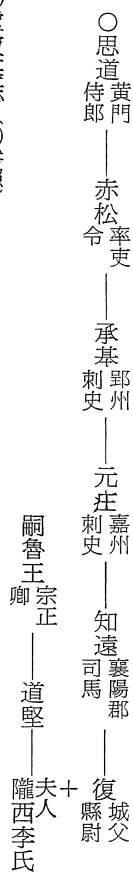
玄默 合州 思慶 德陽 庭実 祁 夫人
司馬 令 縣 清河崔氏

(2) 盧子鷺墓誌

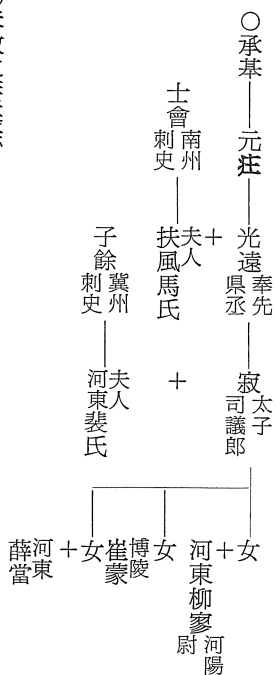
○知遠 賓州 龍 河中府 太常寺 字子鷺
刺史 戶曹參事 奉礼郎

+ 夫人 博陵崔氏

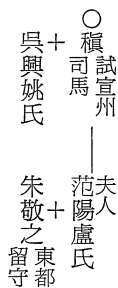
(3) 盧復墓誌 (4) 參照



(4) 盧寂墓誌 (3) 參照



(5) 朱敬之妻墓誌



(6) 盧君夫人崔氏墓誌



隋唐時代の上層郷邑社会 (そのII)

VI、太原王氏の場合

(1) 劉夫人墓誌

○僧辯太尉……良丞僕寺——瑗潁陽縣丞——從長試右武衛兵曹參軍——夫人
太原王氏

彭城劉思友試左武衛兵曹參軍——戡開封府主簿

証潁川刺史——渙協律郎——夫人
渤海高氏

(2) 劉夫人墓誌

○察平原郡長史——悌甘泉府折衝——徹臨渙縣令——夫人
太原王氏

彭城
劉府君

(3) 王詢墓誌

○璋太子右衛率——瑾鄭州司馬——榮和州長史——詢行郴州錄事參軍——夫人
趙郡李氏

(4)王玄裕墓誌

○達涇州刺史—震滑州錄事參軍—□統軍—玄裕

纂晉州長史—念祖越州司倉參軍—⁺夫人南陽張氏

(5)王令墓誌

○昱北海縣□—秀鄧州錄事參軍—□—令儒林

⁺夫人隴西李氏

(6)王立墓誌

○陶并州刺史—觸忻州司馬—立吳山縣丞

寧定州刺史—⁺夫人武威成氏

(7)王君墓誌

○誰大史令—伯仁德州刺史—則博昌縣令

⁺夫人南陽張氏

(8)王和墓誌銘

○頭相州司馬——業襄陽郡守——護大寧幢鷹□郎將——和榆杜令
宗鄭縣丞——隴西李氏夫人

(9)王爽墓誌

○戢臨何郡司馬——就河内郡參軍——烈信安太守——爽吏部常選
璟芝兵部常選——東平呂氏夫人

(10)王訓墓誌

○洛陽——敬太和州司倉參軍——訥馮翊府果毅——訓臨武令
果丞——會稽朱氏夫人

(11)王朗夫婦墓誌銘

○昶……祭沂州錄事參軍——朗雲騷尉
彦——鉅鹿魏氏夫人

(12) 王侁墓誌銘

○ 陟 沂州 — 僧 安陽 — 感 平原府左 — 侁 左衛
司馬 具令 果毅都尉 大將軍
+ 夫人 隴西李氏

(13) 王岐墓誌

○ 湖 直 鄧正 — 子 紹 竟陵郡 — 岐 綿州錄
都督 書佐 事參軍
+ 夫人 隋州 — 京兆孫氏
錄事

以上にあげた例によって、注目すべき点について考えてみたい。

第一にあげられるのは婚姻関係の多種多様さである。例えば、滎陽鄭氏の婚姻相手は、博陵崔氏三、河東裴氏一、太原王氏二、京兆韋氏二、渤海高氏一、渤海封氏一、河南元氏一、素昌李氏一とみえ、清河崔氏の婚姻相手は、鉅鹿魏氏一、隴西李氏二、滎陽鄭氏三、范陽盧氏三、彭城杜氏一、南陽張氏一、渤海刁氏一、次に太原郭氏の場合は、彭城劉氏一、河南元氏一、清河張氏二、太原王氏一、平陽柴氏一とみえており、次に趙郡李氏の婚姻相手は、范陽盧氏一、太原王氏二、清河崔氏一、滎陽鄭氏一、郡望の記していない崔氏一、盧氏一がみえる。次に范陽盧氏の婚姻相手には、清河崔氏一、博陵崔氏三、隴西李氏一、扶風馬氏一、河東柳氏一、河東薛氏一、吳興姚氏一、それに郡望を記さない朱氏一が見える。次に太原王氏においては、鉅鹿魏氏一、彭城劉氏二、渤海高氏一、趙郡李氏一、南陽張氏二、隴西李氏三、武威成氏一、東平呂氏一、会稽朱氏一、京兆孫氏一とみえている。

さて、婚姻は、一般的にいえば一つの地縁関係の中において成立の可能性があることからみれば、ここにみる郡望の多

種多様さ、さらに、特定の婚姻相手があるわけではなくて、全国的な郡望の広がりが見られることは、これらの人々がすでに郡望の地に居住せず、河洛地方という、地縁的社会生活圏に移住し、その中に居住していたであろうことを示している。その故にこそ、河北地方の郡望をもつ人々と、江南地方の郡望をもつ人々の婚姻も可能であったわけで、今や郡望は、単に遠い昔の祖先の出身地を示すのみで、現在の彼等の生活とは殆ど関わりのないものであったといえよう。

第二には、第一と関連するのであるが、上の婚姻表には、郡望の明らかなものを挙げ、郡望の不明なものは殆ど省いてあることである。例えば太原王氏の場合、王儉の妻は単に夫人劉氏とみえるのみであり（王儉墓誌）、王瑩の妻は李氏とみえるのみであり（夫人王氏墓誌）、王留の妻は張氏というにすぎず（王留墓誌）、王護の妻は夫人路氏であり（王護墓誌）、王賛の妻は姬氏（王賛墓誌）、王嘉の妻は李氏（王嘉墓誌）、王纂の妻は夫人吉氏（王纂墓誌）などとみえるのみである。これは他の諸氏においても同様である。⁽¹⁵⁾ 上述の婚姻表にみても、いくつかの郡望を記さない例があったが、そのような例はどのように極めて多く見出せる。このようなことは、夫人たる女の側についてのみならず、主人たる男子の側についても同様で、一々あげるのは省略するが、男子について郡望をあげぬ例は、太原王氏七例、弘農楊氏六例をかぞえる。

しかも、このような傾向は単にこの「遺文」でみられるだけのことでなく、全唐文の中にも、「益州温江縣令任君神道碑」（全唐文一九四）に、

「公諱晃樂安博昌人也。……夫人姚氏徵士神俊女也」

とあり、「唐陳州宛邱縣令高府君夫人河南宇文氏墓誌銘」（全唐文二二六）に、

「夫人諱某、河南郡人也。……夫人……適於高府君。」

とみえるように、唐代においては郡望をあげない例はかなり一般的であった。

このことは極めて注目すべき点であろう。何故なら、これらにおいては郡望は全く無視されている、換言すれば、郡望

なるものは最早婚姻の条件としては大した意味をもたなかったであろうことを示唆するからである。このことは、郡望が政治的にも社会的にも、實際生活においてはその意義を失いつつあったことを示すものといわねばなるまい。

次に第三に注目されるのは、この地に集まった人々の間に、いくつかの夫々の社交グループが形成されていたのではないか、ということである。というのは、上の婚姻表の中には、ある家族と他の家族との特別の關係がみえるからである。

例えば、郭氏の場合、思謨と思訓は兄弟である。思謨の夫人は彭城劉氏、河南元氏、清河の張氏であるが、思訓の夫人は清河張氏、平陽柴氏である。この場合、それぞれの清河張氏がどういう關係にあるかは直接的には明らかにできないにしても、思謨の夫人が継室であることからみて、思訓夫人の推薦があったと考えられないこともあるまい。

或は崔稭と崔程とは従兄弟の間柄であるが、その夫人は共に滎陽鄭氏に属する。しかもその夫人もまた従姉妹の關係にある。このことは崔湛の子孫と鄭欽の子孫とが密接な交友グループを形成していた証であろう。

滎陽鄭氏の叔則、叔規兄弟の子孫についてみるに、叔則の子孫は范陽盧氏、趙郡李氏、博陵崔氏、河東裴氏、太原王氏と、叔規の子孫は博陵崔氏、太原王氏、渤海高氏、杜陵韋氏と婚姻關係をもっている。ということは、この兄弟の家を中心として、これらの人々が姻戚關係をもち、それらを通じて密接なグループを形成していたであろうことは否定できない。更に、盧知遠と盧光遠も兄弟であるが、知遠の子復の妻は隴西李氏、光遠の夫人は扶風馬氏、光遠の子寂の妻は河東裴氏、寂の女の夫は、河東柳氏、河東薛氏、博陵崔氏とみえるので、これらの人々が盧知遠兄弟の家を中心に、一つの社交グループを形成していたことも事実であろう。

これに関連して考えられることは、上述の清河張氏とか、博陵崔氏とかいわれる家々が、近い血縁關係にあったか否かは仲々確め難いことではあるが、例えば次のような例もあったわけである。全唐文(二五九)の「大唐洛州濟源里宗姓奉為高宗天皇大帝於奉仙觀敬造太上老君石像碑并序」によると、

「洛州濟源縣宗姓。前河陽令李儒意、雲騎尉李公協、騎都尉李德異等二百五十人。去隴西而違故里。冠冕之風尚。傳就河朔。而客他鄉。箕裘之業。無替譬。」

とみえている。これは隴西の李氏に属する二百五十人が、洛州濟源県に集団移住していたことを示すものである。とすれば、他の諸氏にもこのような例が全くなかったとも断じ難く、時にはこのように集団的な移住があり、更にそれが夫々の間の婚姻關係に發展したこともあったと見る場合もあったかも知れない。(補注)

以上のように考えてみると、この河洛の地に全国から多くの人々が集まってこの地の人となり、それによって、ここをその生活圏として相互の社交グループを形成していたこと、更に、それらの生活圏内においては、所謂郡望にとらわれることのない、すなわち家柄とか家系とかにそれほど制約されることのない、自由な婚姻關係が成立していたことを示すようである。これらのことは、この河洛の地に、従来の門閥社会には見られなかった、全く新しい郷邑社会が生まれていたことを証するものであらう。

結 語

では、この新しい郷邑社会は、どういう性格のものであったらうか。前述婚姻表によってみると、そこにはその性格を推定せしめる材料が見えるようである。すなわち、夫人の祖先、父の職業、地位、或は夫の家系、職業、地位などについてみると、共通の特徴がある。

その特徴の第一は、大方の人々が官僚家に属する、それも特別の場合を除いては地方政治に関する地位が圧倒的に多い

ことである。勿論、夫人の家系については不明の場合も多いが、明らかである限りは、夫の家系の場合と全く同様である。このことは、男、女両方の側が地方官僚に属するという、政治的にも社会的にも同類項であったということになる。このような両者の共通の性格が、これらの人々を一つのグループとしてまとめ、その間に婚姻関係を成立せしめた基本的要因であつたといえよう。

第二には、彼等の祖先は、各地の地方官僚をつとめていた場合が極めて多いということである。各地を経巡りながら、河洛の地におちつき、この地で婚姻関係を結んだということのようである。このことは、これらの家々は、殆どの場合土着的性格はもたなかったということであろう。すなわち、これらの婚姻は、地方郷邑の上層に属する寄生官僚家相互のものであつたといえよう。

このように考えてみると、ここに生まれた郷邑社会は、地方官僚としての経歴をもつ家々が、河洛の地におちつき、ここに中央権力機構の末端としての地方支配階層を形成していたということのようである。その構成員はどこまでも官僚であり、俸禄生活者であり、土着的性格の強い地方土豪層とは全く異なつた社会階層であつた筈である。

さて、最後に一言述べておきたいのは、前述のような全国的移住が隋唐時代に急増したかに思われることは、どのような理由によるのかという点についてである。これについては前稿¹⁶⁾において、政治的側面―隋朝の中央集権体制による地方官掌握―と、経済的側面―土着性からの離脱―、その結果としての地方豪族の寄生官僚化を指摘しておいた。

ただし、やはり次のような点を強調しておくべきであろう。以上のような隋朝の政治的、経済的特殊事情成立の前提として、北朝による南朝の征服、その結果としての隋唐による全国の政治的統一支配という事実があつたことである。このような江北を江南とを一つの政権の下に統一するという事実なくしては、江南とか江北とかいう出身地にかかわることのない婚姻の成立や、元来は南朝官僚家に属した人々と、北朝官僚家に属した人々との生活圏としての郷邑社会の成立

は考え得られないであろう。南朝と北朝という政權の対立の解消は、単に政治的統一をもたらしたということのみではなく、地方郷党社会の新しい形態をもつくり出したようである。

以上

(註)

- (一) 以上については、宇都宮清吉氏「漢代豪族論」(『東方学』第二十三輯)、永田英正氏「漢代の選挙と官僚階級」(『東方学報京都』第四十一冊)、拙著「門閥社会成立史」第五章、等参照。
- (二) 「第一經大論集」(七卷三・四合併号)
- (三) 拙稿「郡望と土断」(『史学研究』一一三号) 参照。
- (四) 後述「処士王義墓誌」参照。
- (五) 「隋唐時代の上流郷邑社会(そのI)」
- (六) (三)に同じ。
- (七) 同右。
- (八) 拙稿「東晋における南北人対立問題」(『史学雑誌』七七・一〇)。
- (九) 拙著「門閥社会成立史」第五章参照。
- (一〇) (三)及び(八)。
- (一一) (八)に同じ。
- (一二) (五)に同じ。
- (一三) 「山右冢墓遺文」所収。
- (一四) (八)参照のこと。
- (一五) 例えば弘農楊氏についてみるに、楊芸の妻は夫人張氏というのみ(楊芸墓誌)、楊貴の妻は単に武氏(楊貴墓誌)、楊宝の妻は張氏(楊宝墓誌)、楊廙の妻は竇氏(竇夫人楊氏墓誌銘)、楊彪の女の夫は毗沙とのみ見え(毗沙妻楊玉姿墓誌)、楊侯の孫女の夫は郭氏(郭君夫人楊氏墓誌)とみえるのみである。
- (一六) (五)の論文参照。

補注 「山左冢墓遺文」朱岱林墓誌、参照。